



オー・ルー
ジュ



short remix

アベ タカヒロ

乳色のレールがほんのわずかに切れていて、宙に浮くジェットコースター、中央やや右手後方から左手前方へ遠近による興奮が発するから、徹底して停止しながらも迫る。

嬉々とする二列の顔が漏れなく揃い、つかんでみたら指と指の間で乳色が膨張しそうな大入道雲がパンザイされた指先の背景に、こんもりした発色のよい千葉に揺れ動きが間々感じられるのを右下にして、そこへ文字に立体を施した「一日乗り放題」が重なっている。

表から裏、裏から表にしてみるが、勢いよく差し出されたからつい受け取っていた。ちらつく後悔で固まったままでいた。

「な、おもしろそうだろ」

目許や口許をやわらげようと、がんじがらめの表出に努力し、この場を保留することにやっとな、即答したいがでもがまた裏に返すことへとなり、

「実家にまだ模型があるんじゃないかな、親が片付けてなければ」

細かな文字がいちめんを黒く這いまわっている。手前へ近づけて読み取ろうとすれば日本語なのか、はたして文字なのかさえ怪しい蠢くなにかで、そもそもぼけた焦点がまったく改善されないのはなぜなのか奇怪だったから片付かない怪奇なこの場をまた留保に反してみるのだが、ジェットコースターの先頭に乗る二人が文字変化の裏ではいつのまにか父と母の表でびっくりした。

さらりと触れてくる。額でなにがをしだいに理解しはじめたとき、スカートが目尻をひらりと掠めていった。ひやりとする金属の棒にもたせかけていた側頭部を、やる気がさらさらしない中、決して辛くももちあげたあと、決してそそがれる視線などない、その中にと、口許をさりげなく拭い、目尻と目頭に指先をあてた。

乗客たちの行方の結集と詰めこまれたトランクと科学技術の粋を詰めこんだジャンボジェット機が上空高くで静止しているかに見えていたはずだった。ところが間違いなく乗るゆりかもめを追い抜いて、高度も下げつつある。機体が確かなコントロールを膨らませて行くことがあって、いっしょに視界に映しとられたメジャーの高層建築物にそれを添えたとき、着陸態勢とまで推測できる。

一定だった明るさが一息に変化した。薄かった一様の間隔で車内にできる影模様が空騒ぎし、長椅子に空元気の背が押し付けられる長い間が方向感覚を彷徨わせる。あくまでも無人の運転席の空いた空間の向こうに、科学技術と暇にまかせて折り合いをつけていれば、向かうところが標的的として捕らえられ、沈んでいた澱が頭に来た。陸と陸のはじどうしをつなごうとしただけの橋が、めくるめくめぐりあわせがめくれまくる猫の目のような同工の墨色の格子を、乗客や広告にいくつも描く。

輪を確かめられない痛烈なお日様と海面の照り返しの激しさ。水平線が消えている。石組みの波止のそばでは屋形船らしき一葉が浮かぶ。彼が子午線を通過したばかりの昼時に、もう夕餉の支度にかかるように見えてしまった。もしかしたら当てているのかもしれない。

やるかやらないかのみのはっきりした動作がいちいち起きているはずなのに、張りや切れめを忘れさせる参上のようなエレベーターが舞い上がる。誤って停まらずとも最上階を越えてどこまでも昇りそう。ところが、なめらかなドアがとろけそうに開くと、そこが表玄関だった。

なんだか鈴を押してみるがぶうぶうと鳴ったきり顔を見せない。しめたと思ってとっとと引き揚げたしまうマナー違反が引っかかり、少々弄ばれてしまってもしまいには引っかかるはずが、戸の遊びに引っかかったようでもなく、もう少し引けてしまった。後ろ髪を引かれる思いでふみこみ、静かに後ろ手に閉めたが、派手に閉めた場合だと逆効果の逆だった。ひとの家の玄関で立ち竦んでいることがよくわからず、居心地の悪さというものをいつどこであつてもどこかへしまっけてしまいたい。おかしい。忍び

笑いが新たな忍び笑いを呼び、その自然さにゆったりとしまったと言ったり、ようやく次に家主を呼んだ。

羨ましいことにいくつもあってしかもすべてが広すぎて不便な、どちらかというとはやはり羨ましい、どちらかというとは妬ましい広い部屋を探しまわるも細井に遭わずに済んでいたが、Tシャツと志がなんとなく湿ってきたころ、彼のものらしいくぐもった声がソファでし、ベランダにでていると聞こえた。ではそうしてやろう。

正しく聞き取っていたとしても実際なかなかそういうわけにもいかなかった。おかしくってやっつけられるか。思い起こせば、夢の寝心地の良さが晩にとりすぎた脂の悪さでいい夢ごと壊された朝っぱら、カサルスが弾くチェロの音色が寝返って、なぜか不快に轟いた。やかましい着信が細井だった。

日を改めて客になるつもりもない。帰ってもやましくないだろうが、音楽にうるさい細井が、あそこまでやかましいやつでなければ……、おかしくなければ、改まった放送がある。丸くなった、黄緑色の額縁におさめられた置物のような猫を正面にして、もういちどソファに寝そべった。

迷路のような廊下が、時代にとり残された旧式のガードレールが沿う片側一車線のうねる山道をいく車内から山谷でためた海が張って望めだしたいつかの思い出が、しだいにとり残された思いでゆくため谷山の膿を休止期のガードルから肩側一斜線の弛んだ山路がうなって反ったいつかのしゃあないにしながら、廊下のような迷路に変わった。浅井某くんだりのお目にかなったベランダにはじめてお目にかかった。思考回路が疲れで吹き飛んだ。

家屋部分を出てみたら畳が一面に敷かれているかしましいおかしみとはいったいどういうことだ。十畳だろうか、数えていない。整えて畳まれた淫らな中央政府を身だしなみ令の布告によって乱したある勇敢な官庁長官の一面が一面見出しとなった朝刊を足蹴にするように脚に敷くテーブルの中央では模型らしきものがのって、なんであるのか、なかなかかばかしい理解が得られない中途にカツカツと正しい以外の何ものでもない慌ただしさが聞こえ、意外なその方を仰ぐととぐる状の階段があり、言ってみればなにかを言えばなんでももっともらしく聞こえる音に聞こえた細井ごときなんてこともない人物が降りている途中だった。ミニチュアダックスフンドのミニチュアがしたらせん状の大きいほうのミニチュア付なんてなんてばかばかしい。